



飯塚 瑠衣さん

● 多田小6年 ●

夢のある
洋菓子を作りたい

私の将来の夢は、パティシエになることです。

甘いものが好きなので、おいしいケーキやシュークリームなどを焼いて、みんなを喜ばせたいからです。そして、みんなが「おいしい」「きれい」「かわいい」と言ってくれるように、味だけでなくデザインも工夫したいです。

また、自分のお店が持てたら、とてもうれしいです。仕事は大変かもしれませんが、この夢を実現させるために、これからもっと勉強したいと思います。

みんなの広場に
出してみませんか？

「キラリ★話題の人」「すてきな仲間たち」「めおと人生」「すてきな仲間たち」「めおと人生」は隔月で掲載します)に登場していただける方を募集しています。自薦・他薦は問いません。

■問い合わせ先
政策調整課広報広聴係
(☎) (20) 3037



- 活動日 毎月第2・第4土曜日
午後7時～8時30分
- 会場 佐野中央公民館ホール
- 連絡先 会長 青山 恵子 ☎(22)0801
会計 藤田るり子 ☎(24)3990
会計 関根 和子 ☎(22)5290

すてき **仲間たち**

佐野中央フラ・ワヒネ

— ALOHA —

皆さんこんにちは。

私たち「佐野中央フラ・ワヒネ」は、昨年4月よりの、まだまだ初心者ばかりのフラダンスサークルです。

年齢に関係なくフラしませんか。

「フラを踊ると心も身体もニュートラルになる」と言われます。皆さん楽しい人ばかりです。

月に2回、第2・第4土曜日に活動しています。

さあ、一緒に始めませんかー。



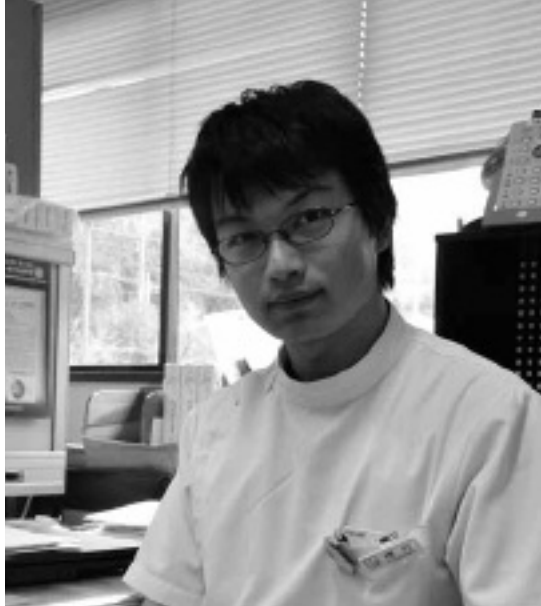
今回の表紙「カタクリ」 三義山：万葉自然公園かたくりの里(町谷町)にて

カタクリは「佐野市の花」としてシンボル指定され、市民にもたいへん親しまれている花です。毎年おおむね3月中旬から4月初旬にかけて薄紫色の可憐な花をつけて、訪れる人々を楽しませています。また、同公園のカタクリの群生は、関東一といわれています。

氷室診療所医師

かずき

橋村 和樹さん
(水木町)



キラリ★

話題の「ひと」

○プロフィール

昭和56年東京都練馬区生まれ。慶応大学医学部卒。初期研修で練馬総合病院、後期研修で都立府中病院で研修。現在、氷室診療所医師。

氷室診療所に 新しい風

県内の公的医療機関などにおける深刻な医師不足に対する支援策として、平成18年から県が「ドクターバンク制度」として医師募集を行っていきます。その第1号として、平成21年4月1日付けで、橋村和樹医師が採用され、国民健康保険氷室診療所で勤務しています。

橋村医師は、練馬区の勤務医の家庭に生まれ、後期研修時代に三宅島と新島で離島医療を経験し、へき地医療に携わることを決めたとき、この「ドクターバンク制度」をネットで知り、氷室診療所を見に来て、応募を決意したそうです。同診療所での診療時間は、午前8時30分から午後5時30分。訪れる患者さんは1日に約20人。看護師さん、事務員さん、そして橋村医師の5人のスタッフで運営される同診療所は、アットホームな雰囲気、先生が周辺住民から頼りにされているのを感じます。

同診療所では「この地域は高齢の方が多く、喫煙が当たり前と思われている方も多い。自分だけではない、周りの人の健康のためにも、ニコチン依存を無くすお手伝いができれば」との橋村医師の発案で、昨年7月から「禁煙外来」を始めました。この取り組みも、田沼、葛生地区の病院、診療所では初めての試みとなりました。



診療中の橋村医師

赴任してちょうど1年がたち、佐野市の印象を「人との距離が近いまち」と表現し、「地域の方の優しさは言うまでもなく、行政の方の親身な心遣いも合わせて、温かいぬくもりを感じさせてくれるまじです」と話してくれました。

昨年11月に、第1子が生まれた橋村医師は「近くに同年代の子どもが少なく、友達作りや就学環境を考えると、将来は市街に住み、診療所に通う形になるのかな。「男のロマン」だけでは乗り越えられない壁つてありますよね」と苦笑いしながら将来の悩みを話してくれました。そこには、地域の人たちを思い、家族の将来を考え、真剣に憂いる姿が見えました。

診療所のスタッフの方も「本当に患者さん思いの優しい先生です。長くいていただきたいですね」と話す、そんな素晴らしい医師を迎えることができたことを、一市民として大変嬉しく思います。

(市民記者 永倉 文字)

佐野弁 ばんてい

佐野のアクセントは なぜ複雑なのか

佐野市のように、一つの市に三種類ものアクセントがあるのはなぜでしょうか。栃木県は、もとは高い低いのはっきりとした東京式アクセントでした。しかし、別の異なる東北方言アクセントと衝突したために、その境界には明瞭性に欠けた曖昧(あいまい)なアクセントが発生しました。その曖昧なアクセントが、福島・那須地方から宇都宮へ、さらに南下して佐野へと伝わってきました。

そのために、佐野地域(旧佐野市)のアクセントは曖昧化して、高い低いの区別を失う一歩手前まできました。このアクセントの曖昧化がさらに進むと、やがては高い低いの判別ができなくなってしまう、那須地方、宇都宮市・栃木市・小山市などのように、無アクセントになってしまいます。

田沼・葛生地域も、曖昧アクセントが変化し、今では無アクセントになっています。ただ、同じ地域内にありながら、彦間・飛駒地域だけは東京式アクセントです。それは県北地方から押し寄せてきた曖昧アクセントの影響を受けなかったからです(東京式アクセントである足利とは無関係です)。

県内のアクセントの歴史をみると、東京式アクセントと曖昧アクセントと無アクセントへと変化してきました。その変化の過渡期にあったのが佐野方言ということになります。いずれは彦間・飛駒地域も曖昧化し、無アクセントになるところでしたが、マスメディア・交通などの急激な発達によって、現在のアクセントの崩れはなくなるとみていいでしょう。

(市民記者 森下 喜一)